

☆子育て広場☆

令和6年9月2日 No.17
温知学舎 世田谷区立鳥山小学校
すまいるルーム

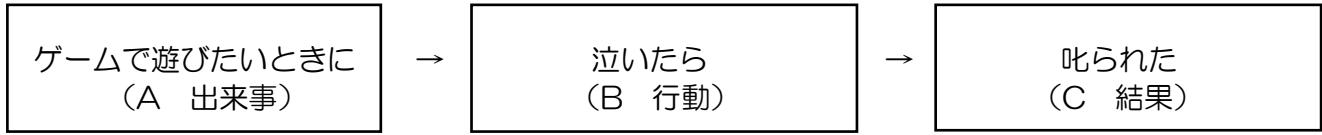
応用行動分析学を通して

先日、応用行動分析学について学ぶ機会がありました。応用行動分析学とは、「人間の行動の理解とその改善に全力を注ぐ科学」であると言われており、行動上の問題があるとすれば、その環境を変えればよいだけの「誰のせいにもしない優しい学問」だという話がありました。

例えば、

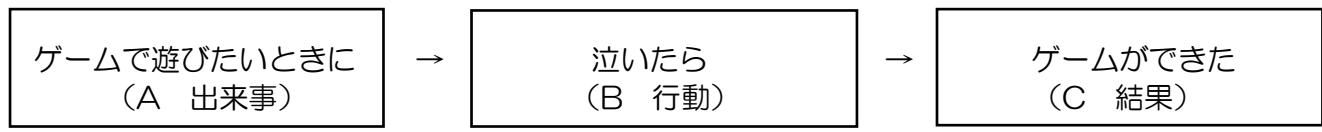


というように、良い結果が得られたら、その後も「貸して」と言えるようになります。(強化)
一方で、



のように、望ましくない結果が得られたときには「泣く」という行動は起きにくくなるかもしれません。(弱化)ただし、

※応用行動分析学では、弱化(罰)は用いません。



という自分にとって良い結果が得られてしまうと、その行動は増えてしまいます。(強化)

この場合、「泣く」という行動は問題とされてしまいがちですが、応用行動分析学で考えると、問題は「A出来事」や「C結果」との相互作用で生じているのであって、子どもの行動が悪いということではないそうです。

重要なのは、「泣く」という行動が起こる前の、場面や状況、きっかけを観察することです。客観的で具体的な事実を記録したり、いつ、誰が、どこで、何を、どのようにしたのかを把握したりすることで、予防対応が可能になります。例えば、実は友達から「ダメ!」と言われてパニックになった、貸してもらえたと思い込んでいた、暑くてイライラしやすかったなど、意外と様々な理由が隠れているかもしれません。

これらの環境調整を行うことで、「泣かずに待てた」「貸してと言えた」などの望ましい行動につながり(B行動)、その結果「褒められた」「ゲームができた」「友達と楽しめた」など喜びにつながることで(C結果)、より一層望ましい行動が強化されていくことになります。

なぜ泣くのか、なぜできないのか、なぜ忘れるのか…。

一見問題行動だと思ってしまう行動の背景を考え、様々な視点で子どもたちの行動を観察し、支援していきます。